

Title	2) 「研究開発コロキウム」報告〔要約版〕：〔大学院 GP〕採択：心理臨床における「知」について--「非日常性」という概念を手掛かりに--
Author(s)	河野, 一紀; 伊藤, 良子; 春木, 奈美子; 谷垣, 紀子
Citation	研究開発コロキウム：平成20年度 成果報告書 (Colloquium for Educational Research and Development) (2009): 44-45
Issue Date	2009-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/143119">http://hdl.handle.net/2433/143119</a>
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

心理臨床における「知」について  
—「非日常性」という概念を手掛かりに—  
“Knowledge” in Clinical Psychology  
—With the Focus on “the Unusual” —

研究代表者 河野 一紀 (D1)                      教員 伊藤 良子  
研究分担者 春木 奈美子 (D1)                  谷垣 紀子 (M3)

【研究目的】

心理臨床という一つの営みはその専門性を高め、社会的な関心も集めつつある現在、心理臨床という固有の領域から、その「知」の在り方を検討することは急務であると考えられる。そこで、本研究科において採択されている大学院教育支援改革プログラム「臨床の知を創出する質的に高度な人材養成」のプロジェクト名にも冠されている「臨床の知」という概念について検討していき、その在り方を明らかにしていくことを、本研究では目的とする。

その際に、本研究で着目していくのは、「非日常性」と「無意識」という二つの概念についてである。まず、本研究で、「非日常性」という概念を取り上げるのは、心理臨床の営みが我々の日常の在り方といかに関わっているのかということ考察したいと考えているためである。というのも、心理臨床の営みは、社会においては我々の日常生活の場と対比され、さらに治療的な観点においても科学的医学と対比され、「非日常性」という概念を帰せられた営みであると考えられるためである。次に、「無意識」という概念を扱うのは、それが Freud, S. によって考え抜かれた、我々人間に関する一つの知であり、現在の心理治療の源流でもある精神分析という営みの根幹をなすものであると考えられるためである。さらに、この「無意識」という概念は、今日の心理臨床にあつて、その理論においても、また臨床実践という経験的探求においても重要な位置を占めており、「無意識」をめぐるその知がかたちづくられていると考えることができるからである。

このように本研究では、「非日常性」と「無意識」という概念と関連づけて、心理臨床における固有の知、すなわち「臨床の知」についての考察を進めていくこととした。

## 【研究経過】

本研究は、精神分析や心理臨床、その関連領域にまたがる様々な文献を読み込み、その検討を通じて行なわれた。

まず、中村雄二郎によって提唱され、河合隼雄が心理臨床の領域に持ち込んだ「臨床の知」という概念を検討した。そこから、「臨床の知」が、近代科学の知との対比によって描き出されてきたという経緯が明らかとなった。さらにここから、近代科学を支える知の在り方、さらにはその基盤となる西洋の伝統的認識論において、知というものがどのようにとらえられてきたのか考察した。

「非日常性」という概念に関しては、後述する「無意識」概念についての検討を参照しつつ、それを単に「日常性」との対比においてとらえる従来の考えを批判的に検討した。そこから、「非日常性」と「日常性」の境界、「規範性」についての検討を進めた。そして、「生命の規範」についての Canguilhem, G. の議論を参照しつつ、「無意識」をめぐる「非日常性」と「日常性」との境界としての規範について、その独自の在り方を提示した。

「無意識」という概念については、Freud における基本的な考えを踏まえた後、Lacan, J. と Bion, W.R. といった無意識と知について独自の思索を行なった精神分析家を取り上げて考察をおこなった。そこから、「無意識」概念をもとに考察される「臨床の知」という独自の知の在り方について明らかにした。

## 【研究成果】

「無意識」と「非日常性」と二つの概念の検討を通じて、伝統的認識論における「知」の在り方に収まらず、かつ単にそのオルタナティブにはとどまらない「臨床の知」の在り方が本研究で提示された。この「臨床の知」は、認識主体としての我々の内に所有されるような道具としての知ではなく、既に成立している「いま・ここ」の関係に信頼を置き、そこに未知のものを見出しとどまっていくという緊張状態を支えていく場、あるいは、環境との緊張関係において自らを創造的にかたちづくっていく動きとしてそのような過程を担うものとしての知と考えられた。

今後の課題として、本研究で見出された「臨床の知」という視座から、心理臨床における研究法、研究の意義についてその固有の在り方を探求していく試みを挙げることができる。この点から、事例研究という心理臨床に独自の研究の在り方についての考察や、本研究のような文献研究の心理臨床における意義についての検討も今後なされねばならないと考えられた。